

吉屋信子と林芙美子が残した日中戦争の教訓

宮田 俊行（元南日本新聞記者）

「私達の民族が、支那兵に雑役に使われる」

吉屋信子（1896－1973）と林芙美子（1903－1951）は共に亡くなって久しいが、今もって根強い愛読者のいる人気作家である。2人の作風は全く異なるが、戦争中だけは共通点がある。互いに追いつ追われつ、抜きつ抜かれつ、アジアの広大な戦場・戦地を巡り、多くの記事や著作を残していることだ。

だが、せっかくの命がけの記録も、顧みられることは少ない。ファンも研究者たちも戦争中の著述は「戦争協力」の産物だとの固定観念にとらわれ、目を背けて切り捨ててきた。たまに論評する人がいたとしても、一方的に「戦争責任」を追及する批判の対象である。

実にもったいない。「戦争は絶対だめ、してはいけない」と唱えるだけで済まず、「なぜ」だめなのか、「なぜ」してはいけないのか、そこを考えることが重要だろうに。思考停止すれば同じことはまた起きる。それなのに作家たちの戦時中の作品研究はなかなか進まない。

今、お人好しの日本人が、中国人の移住や土地購入、不法行為などを取り締まろうともせず、野放しにしてきた結果、中国による「侵略、すなわち日本の乗っ取り＝属国化」が現実のものになろうとしている。

林芙美子は昭和13年（1938）の漢口攻略戦従軍後に、「私達の民族が、支那兵に雑役に使われることを考えてみて下さい。考えただけでも吐気が来そうです」と書いている。なんと今の日本の状況に当てはまることか！ 作家たちが決死の思いで残してくれた作品は今こそ、読む意味がある。

通州事件に慟哭 中国人の残虐性

昭和12年7月7日の盧溝橋事件をきっかけに、日中は全面戦争に突入していく。吉屋信子は『主婦之友』から特派されて8月に北支に行き、いったん帰国すると9月にはまた上海に行く。「従軍女流作家第1号」と言っている。

特筆すべきは、8月29日、「通州事件」のひと月後の現場を訪れたことだ。加藤康男『通州事件の真実 昭和十二年夏の邦人虐殺』は、通州事件について詳しいのはもちろん、吉屋信子の『主婦之友』同年10月号の記事と、さらに写真まで豊富に収録しているので有り難い。

通州は、北京の東わずか20^{きとう}ほどにあり、親日的な冀東防共自治政府が治めていた。

冀東保安隊3300人は天津駐屯の日本軍から訓練を受け、城内の日本人居留民（およそ380人）の保護を担っていた。日本側の警備陣（警備隊、憲兵隊、警察官等）は120人しかいなかった。

ところが昭和12年7月29日午前3時すぎ、保安隊3300人が突如、日本人に襲いかかり、徹底的な虐殺をおこなった。居留民の死者225人（内地人114人、朝鮮人111人）、警備陣の死者32人、計257人にのぼった。

当時、北支に住んでいた米人ジャーナリスト、フレデリック・V・ウィリアムズの『中国の戦争宣伝の内幕』には、「日本人の友人であるかのように警護者の振りをしていた中国兵による通州の日本人男女、子供らの虐殺は、古代から現代までを見渡して最悪の集団屠殺として歴史に記録されるだろう。（略）ひどいことには手足を切断され、彼らの同国人が彼らを発見したときには、ほとんどの場合、男女の区別も付かなかった。多くの場合、死んだ犠牲者は池の中に投げ込まれていた。水は彼らの血で赤く染まっていた。何時間も女子供の悲鳴が家々から聞こえた。中国兵が強姦し、拷問をかけていたのだ」とある（もっとむごいことも書いてあるが省略）。

「池」というのは、日本人経営の旅館・近水楼を囲む蓮池のことだ。『通州事件の真実』にも「日本人多数の死体が遺棄され、腐臭を放っていた」とある。近水楼では主人夫婦・女中ら10人と宿泊客14人が惨殺された。

吉屋信子は近水楼に残る血しぶきの痕を見て、「か弱い女性に、武器を持つて、あらゆる暴力、悪逆非道残忍の行為をほしいまゝにし、地獄の責苦のころし方をした、冀東政府保安隊よ、汝等人類の敵、地球上の男性中の最悪劣等卑劣、獣類に半ばする彼等を、日支親善平和の通州の保安隊として、日本軍自ら彼等に軍隊教練を指導して、一人前の兵士に仕立て上げてやつたのだとは——さればこそ、守備隊も通州居留民も、彼等を信頼して、北支事変後も、此処ばかりはと、平和を信じて、動揺せず、その日まで、各自業に安んじてゐた故にこそ、この無残の災禍を受けたのだつた」と、痛切な感情をあらわにしている。人類史上最悪の虐殺という認識で、ウィリアムズと一致している。

そして最後に「あゝ、出来る事なら、この場所へ、蒋介石の夫人宋美齡^{きた}を伴ひ来つて、彼女たち支那の女性の生んだ、支那の男性が、こゝにいかなる女性幼児虐殺を行つたか、見せ、示してやりたいと思つた。宋美齡夫人よ、いかに？」と書いている。ここに宋美齡の名を出してくるとは、吉屋信子は中国が「抗日」で一本にまとまった裏事情をよく知っているなど感心する。

前年11年12月12日に起こった西安事件。西安で蒋介石が張学良に逮捕監禁され、宋美齡は事態打開のため同22日に西安に飛んだ。蒋介石は驚き、妻の安全のために張学良が主張する内戦の停止と共同抗日に同意した。そしてなんと宋美齡は自ら、共産党の周恩来と会談し、国民党と共産党は抗日統一戦線の結成に向けて大きく前進したのである（伊藤純・真『宋姉妹』）。

そういえば吉屋信子は昭和3年秋、張学良と会っている。満洲婦人見学団に参加したとき、朝日新聞奉天支局から勧められたものだ。同年6月に父の張作霖爆殺事件があったばかりだ。朝日新聞は事件翌日には、「張作霖氏遭難の光景」と題した現場写真付きの2頁号外を、東京と大阪で発行してスクープしている。信子は「それが日本軍の策謀だといううわさがヒソヒソ耳から耳へすでに内地で伝わっていた。その御曹司に父の仇なる国の私

たちが面会に行くなんて……」と、気が進まなかった。大帥府（公邸）で信子は黙していたが、「なんだかんだと政治女史方の質問責めに時が過ぎた」という（『私の見た人』）。

ちなみに林芙美子も昭和5年に奉天を訪れたとき、領事館の人から数日いるなら張学良を紹介しますが、と申し出られたが、興味がなく断っている。張学良もこの頃は日本人に協力的というか、少なくとも抗日姿勢を表に出していないことが分かる。

持久戦の思想

昭和6年9月の満州事変が、翌年1月には上海に飛び火して上海事変（第一次）となったように、同12年7月から始まった北支での戦いも残虐な通州事件を経て、上海に燃え移った。8月9日に上海陸戦隊の将校が中国側に射殺される事件が発生し、同13日には日中両軍が衝突した（第二次上海事変）。9月になるとまた『主婦之友』は吉屋信子を上海に特派する。

田辺聖子に『ゆめはるか吉屋信子』という大部の評伝があるが、上海で信子がまだ生々しい戦闘の跡を巡る中で、あれっ？と目を引く記述があった。

信子は上海の女学校「愛国女塾」の廃墟を訪ねる。中国軍の抵抗拠点だったので、日本軍の攻撃を受けたのだ。その校舎から女学生の試験答案が百余枚発見された。試験の課題は「抗日の基本方案」。教師が最高点をつけた答案にはこうあったという。

「一、持久戦……我が対日策戦にて唯一の勝利を博するの道は、戦期の延長、即ち持久戦也。凡そ物資欠乏の国家は戦期の短を利となし、物資豊富の国家は戦期の長期に互るを利となす……」

私はかつて桶谷秀昭の指摘に衝撃を受けたことを思い出したのである。「持久戦という思想を日本軍は持ったことはない。その最高教育機関である陸軍大学の作戦戦術学においても、持久戦を研究課題としたことはない」（『昭和精神史』）

一方、中国では、一介の女学生にまで、持久戦の思想が叩き込まれていたのだ。「信子は思う、女学生の初級といえ、日本の少女なら宝塚・松竹の少女歌劇のスターに夢中になっている他愛ない年頃なのに、＜支那の少女＞たちの何という高い政治意識、愛国の情熱」と田辺聖子は記す。少女小説で人気を博した吉屋信子だけに一層、彼我の意識の差に驚きは大きかっただろう。

実際、このあと12月13日に日本軍は首都南京を陥落させるのだが、戦争は終わらなかった。

自身も海軍報道班員として徴用されてマレーに行った海音寺潮五郎は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の時に加藤清正と小西行長が一番乗りを争って京城に入り、そのあとは追撃しなかったことを引き合いに出して、「一国の首都を陥れたということは大へんなことだから、これで戦闘は終り、朝鮮は降伏すると思ったのであろう。（略）このような失断は、この時の諸将だけでなく、現代の日本人にもある。日支事変の際、南京が落城した時、日本人の大方はこれですんだと思った。だから、昼は旗行列をし、夜は提灯行列をして、盛大に祝った。日清、日露、第一次世界大戦を経験したほか、いく多の国際戦を見て来ながら、この速断をしたのだから、現代の日本人は清正や小西等のことを笑う資格はない」としている（『加藤清正』）。

林芙美子は南京陥落2週間後の12月27日に日本を出発し、同29日に上海に到着。翌30日新聞社のトラックに同乗し、野営1泊のち大みそかに「女性の南京一番乗り」を果たした。拙著『林芙美子が見た大東亜戦争』に詳述したように、南京大虐殺真っ只中のはずの時期に南京を訪れたにもかかわらず、4日間の滞在中、何らの虐殺行為も見なかった。中国側は通州事件という真の大虐殺を隠蔽するために、同じ年の南京大虐殺という一大虚構をでっち上げたのではないか、と思われてならない。私もそうだったが、ほとんどの日本人は南京大虐殺は知っているが、通州事件は知らないのである。

女2人の戦地一番乗り競争は続く

こうして明けた昭和13年、吉屋信子と林芙美子の戦取材競争はますます過熱していく。その時々、最前線へ、一番乗りを目指すのだからすさまじい。

当時の婦人雑誌の読者もまた、それを求めたようだ。『主婦之友』は8月、吉屋信子を満ソ国境に特派した。7月に国境の張鼓峰にソ連兵が侵攻し、日本軍が撃退した（張鼓峰事件）。8月11日に停戦協定が結ばれるまで激しい戦闘が続いた。田辺聖子の前掲書には「人怯じしない信子は兵隊さんや部隊長に気軽に話し、なかには文学愛好家の長勇大佐の如き人もいて、軍人に知己ができるのも信子らしい無邪気さだった」とあるので、危険な目には遭わなかったようだ。

長勇は、沖縄戦で参謀長を務めた。牛島満大将与二人、剣道の猛者の部下に首を刎ねさせるという壮絶な最期を遂げた。墓が福岡県粕屋町の小山の頂にあるというので、3年ほど前、訪ねたことがある。町職員も知らなかったが、大変立派な墓だった。大川周明の碑文がかすれて読めなかったのは残念だった。

吉屋信子のルポは『主婦之友』10月号に、「満ソ国境戦火一番乗り」と題して掲載された。なお、信子は昭和16年10月、仏印サイゴンで長勇少将と再会している。信子がどれだけ戦地を飛び回っていたかが分かるというものだ。

さて、近年、新型コロナウイルスで有名になった武漢。現在の武漢市は戦後、武昌、漢口、漢陽の3つが合併したものである。蒋介石率いる国民政府は、南京から漢口に移転し、抵抗を続けていた。このため昭和13年6月、御前会議で漢口攻略作戦実施が決定された。

そして内閣情報部は8月、文壇から20人のペン戦士、を選んで漢口の最前線へ送るという文壇動員計画を発表した。これに応じた女性作家は2人。陸軍班（14人）の林芙美子と海軍班（8人）の吉屋信子である。林は朝日新聞、吉屋は毎日新聞と契約した。

陸軍班は9月11日、海軍班は14日に出発した。林芙美子は13日に福岡の雁ノ巣飛行場から他のメンバーとともに上海に飛ぶが、到着すると朝日新聞に手を回して単独行動を取り始める。やる気満々だ。17日朝、上海から海軍機で一人南京に飛ぶと朝日新聞の南京支局長宅に泊まり、19日夜、南京から揚子江を遡る船に乗る。23日に九江着。26日には海軍班と遭遇し、吉屋信子とも出会う。「別に大した話もしない」とそっけない（『北岸部隊』）。しかし、皆と会って張り詰めていた糸が緩んだのか、後で「何となく涙が臉につきあげて来た」。海軍班は南京から揚子江溯江艦隊の軍艦に分乗し、菊池寛団長と吉屋信子は旗艦「安宅」に乗って漢口を目指していた。ずいぶん楽なようだが、揚子江には機雷

がびっしりと敷設してあるというので、信子は震え上がり、毎日神棚を拝んでいた（『ゆめはるか吉屋信子』）。

一方、芙美子は早く前線へ行きたいと焦るが、ひどい腹痛を起こして10月1日に南京に引き返す。この頃から陸軍班は数人を残して日本に帰り始め、海軍班8人も杉山平助を除く7人は4日頃には艦隊を離れ、11日神戸に帰り着いている。吉屋信子も菊池寛も漢口まで行かなかったのだ。

ここで諦めないのが林芙美子だ。北岸部隊（揚子江北岸を西進する第六師団）に追いついて行動を共にしようと決意する。10月15日ようやく海軍の輸送機をつかまえて乗り、九江に戻った。さらに移動して作戦開始前日の18日には師団長のもとに挨拶に行く。

芙美子は、朝日新聞社のトラック「アジア号」に乗って兵隊たちを追いかけて、時には追い越して最前線を突っ走っていく。無電と伝書鳩で新聞に記事を送りながらである。帰国後に出版された『戦線』には22信が収録されている。芙美子は詩人でもあり、あふれる気持ちをよく詩に表わしているが、そのうち6信の「兵隊の詩」をぜひ紹介したい（文中では無題）。

私は兵隊が好きだ。
空想も感情もそつと秘めて、
砲火に華と砕けて逝く。
最後まで感情を明滅させることなく、
黙々と進む兵隊よ。

土に伏し草を食ふとも、
祖国への青春に叫喊きょうかんをあげる兵隊！
運命の創口から溢れる、
兵隊のとうとうたる愛情は、
いま洪水となつて戦線に咆え歌ふ。

昭和13年10月26日、日本軍は漢口を占領した。翌日、芙美子も市街に入り、南京に続く女性一番乗りを果たした。

一方、唯一人、揚子江艦隊にとどまった杉山平助によると、それまで毎日大砲を撃ち合っていたのが25日は朝から砲撃がなく、支那軍が総崩れになったのが分かったという。午後、漢口に突入し、上陸した。27日海岸通りをぶらぶら歩いていると、「一寸見るとジプシー見たような恰好をしてゐる女が、赤い風呂敷で頬かぶりの様にして、黒い眼鏡をかけて洋車ヤンチャに乗って来る」。それが林芙美子だった。全くその通りの写真が残っているのが可笑しい（『揚子江艦隊従軍記』）。

杉山は従軍作家22人のうち漢口まで行きつく人は多くないが、林はきっと入るだろうと確信していたと言い、「かういふ実際の場面に来ると人間の本当の力とか本当の魂の深さというものが、偽りなく現はれるものであるといふことを、恐らく日本国民の前にはつきりと闡明されたといふことが明かになり、これが今度の体験の中で、一番愉快な事の一つであつた」と絶賛している。

林芙美子は29日に漢口を去り、31日には大阪に着いた。帰国後、マラリアの熱に苦しみながら、驚異的に仕事をこなす。大阪、東京、九州で従軍報告講演会をおこない、12月に『戦線』、元日には『北岸部隊』を刊行した。

『戦線』の末尾の「附記」に記したのが、冒頭に挙げた言葉を含む次の文章である。

「愛する日本の為には、いま、国民はどんな危険に晒されても国土はしっかりと守らなければならないと思います。戦いはここまで来ているのですから、それこそ、泥をつかんでも、祖国の土は厳粛に守らなければならないと思います。私達の民族が、支那兵に雑役に使われることを考えてみて下さい。考えただけでも吐気が来そうです。(略)私はいま、内地へ戻って来ておりますが、遠く戦線にある、将兵士の方、そして軍馬の武運長久を香かに祈らずにはられません。兵隊さんどうぞ元気でいて下さい」

実はこの思いの裏には、芙美子が揚子江北岸部隊数万の進軍の途中で見た、中国人の捕虜たちのことが踏まえられている。

「捕虜達は弾薬運びや、水汲みなんかに使われていましたが、私は、いかに敗れた国のみじめさとは言え、支那の土民や兵隊が、営々とした格構で、日本の兵隊に使われているのを見ますと、もしも、これが、逆であった場合はどうでしょう、私達は戦って戦って、最後の血の一滴まで悔いなく祖国の為に働きおおせる、そんな民族であることに、私は実に輝かしい自信とほこりを持つのです。／戦争に負ける位みじめなことはありません。いったん砲火が挙がった以上は、泥をつかんでも戦いには勝たなければならないと思います」

吉屋信子と林芙美子との戦争取材競争はこれで終わりではない。日本軍が漢口、武昌、漢陽の3都市を占領しても、蒋介石は再び重慶に脱出して持久戦を継続した。蒋介石が降伏しない背景には、米英が南方の「援蒋ルート」を通じて支援し続けていることがあった。

こうした中、吉屋信子は昭和14年9月、上海の汪兆銘に『主婦之友』社長の「親書」を渡しに行く。汪兆銘は蒋介石と袂を分かって重慶から脱出した、日支和平の希望の星だった。信子は15年末から16年2月まで蘭印に行き、10月には仏印へと、相変わらず『主婦之友』の命で東奔西走していた。そしてサイゴンで米英との開戦を知ったのである。日本に戻ったのは12月18日。それからふた月足らずの17年2月13日、林芙美子に会っている。

「天気よし。林芙美子さんより新築の家を見てくれと招かれて下落合に行く。門内の竹その他わが家を参考にされしごとし。お昼を御馳走になり、最近入手不自由となったサラダ油を貰い、いっしょに新宿に出て「末広、(寄席)に入り、林家正蔵を聞く。お寿司を食べてのち露店にて小さい塗りものの箱を二人とも買う。林さん『お豆をふっくら煮て入れるのよ』と言う。『たのしかったわね』と別れて帰る」(『私の見た美人たち』所収「わが日記物語」)

「治にいて乱を忘れず」という。「お豆」の話をしながらも林芙美子は、吉屋信子自分より先に南方を回ってきたことを忘れなかったに違いない。それから間もなく、陸軍省報道部の囑託で南方に派遣されることになった女流作家7人の中に入り、昭和17年10月末から翌18年5月まで、蘭印を中心に7か月も滞在することになる。本稿は日中戦争がテーマなので、これについては拙著等を見ていただきたい。

参考文献

- 加藤康男『通州事件の真実 昭和十二年夏の邦人虐殺』(2019、草思社文庫)
フレデリック・V・ウィリアムズ、田中秀雄訳『中国の戦争宣伝の内幕』(2009、芙蓉書房出版)
※原著『Behind the news in China』は1938年にニューヨークで出版された。
伊藤純・真『宋姉妹』(1998、角川文庫)
吉屋信子全集12『私の見た人・ときの声』(1976、朝日新聞社)
田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子』(2023、中公文庫)
桶谷秀昭『昭和精神史』(1996、文春文庫)
海音寺潮五郎『加藤清正』(1986、文春文庫)
宮田俊行『林芙美子が見た大東亜戦争』(2019、ハート出版)
宮田俊行『花に風 林芙美子の生涯』(2020年、海鳥社)
林芙美子『戦線』(2006、中公文庫)
林芙美子『北岸部隊』(2002、中公文庫)
杉山平助『揚子江艦隊従軍記』(1938、第一出版社)
吉屋信子『私の見た美人たち』(1969、読売新聞社)
八原博通『沖縄決戦 高級参謀の手記』(2015、中公文庫)